

義仲勲功圖會

九

~ 13
3380
9



門 13
號 3380
卷 9

木曾義仲勲功圖會後編卷之四

北軍洛中狼藉餘

浪速 山珪士信考訂

去程小本曾殿八榎口ヲ往進不也。必勝の鋒先を弛都引及さる其風草
都へ歩えんを洛中洛外の人民大に敬馬た。木曾殿平家を征伐せどて平
途より引及さる。奈何なる更あやと安た心ハかりたり。十郎行家ハ院
して奏さる。義仲西國へ下向あがら半途より引及ハ弥平家と合睦
仕る不疑なく。此上ハ其半の勢を以て地下里平家を追討仕ゆ。是ハ行家
院中をばりと東新ある。行家畏り手二千余騎中播列(弛下る。是ハ行家
深た巧とかり。其故ハ飽ま。義仲を幾しれむ。木曾都ホ上り自然逸奏の
更露顯せん身の大事なり。且木曾半途より引及せし。平家之氣を弛え
油断して在ん其不意を伐り自己の武功を顯さんと。行家を回して斯らり
かり。木曾殿ハ探不とんで都(凱陣あり。榎口等小對面。委曲を度し。以ハ

功刃司會後四

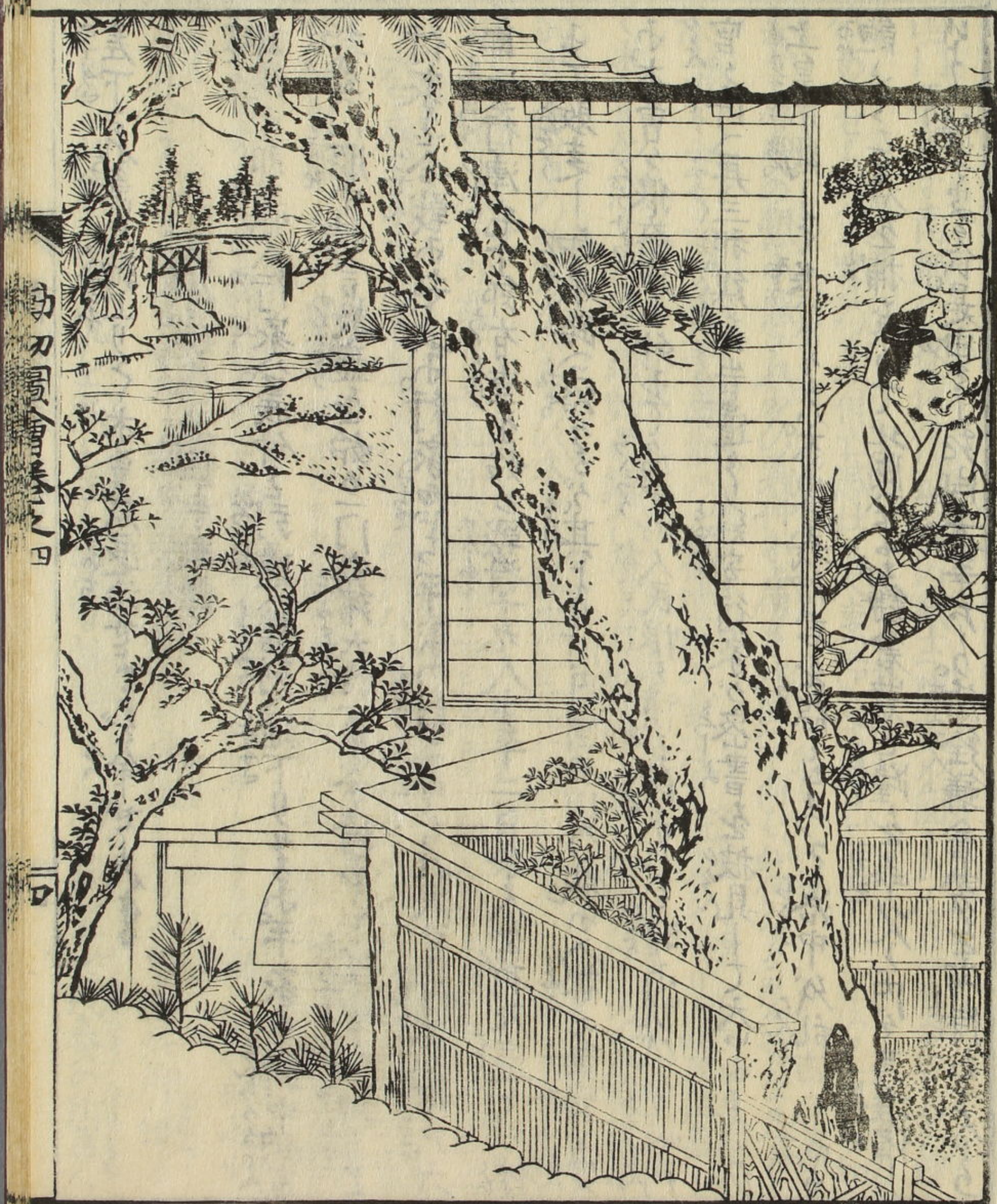
大正十年八月九日寄
本大學出版部贈

借閑東の動靜を由合さるる或と頼朝黄瀬川やぐ出張ともいひ。いまも
 出陣かゝともいひ。更小実否分かれ大い後悔あり。是皆逸者の流言にて
 人心を迷はす。このころ西八伯叔行家之予が年来の好意を由不顧予と
 後より軍戎及ませ。己引違て西國下り。二つハ我功を奪ん巧と。二つハ我
 小面合さる。逸奏の罪を責らまん。吏を恐る故なり。所詮此ハ院参りて
 逸者中賜らんと。十分憤怒の懐胸ハ満。麾下の勇士數十人を牽具し
 て院参ある。法皇ハ我仲ハ院参とると。空口敬馬せむ。御不例と稱し。と
 引籠らせむ。木曾殿ハ階下ハ蹲居。参侯の旨ハ通下む。静賢法印。摺
 立出。對面し。中々ハ法皇ハ。兩三日以前より。御不豫あり。引籠らせむ。依
 某ハ貴將。乃日上承。まの院命なり。先法皇の御意あり。義仲戦方を厭ず
 平家追討乃為西國。下る条。神妙ハ思召を早く。勝軍を報し。神言を還
 御か。なまき。と。樂待。む。処ハ。其義。なく。半途。より。引及。せ。ハ。如何。なる。子。細

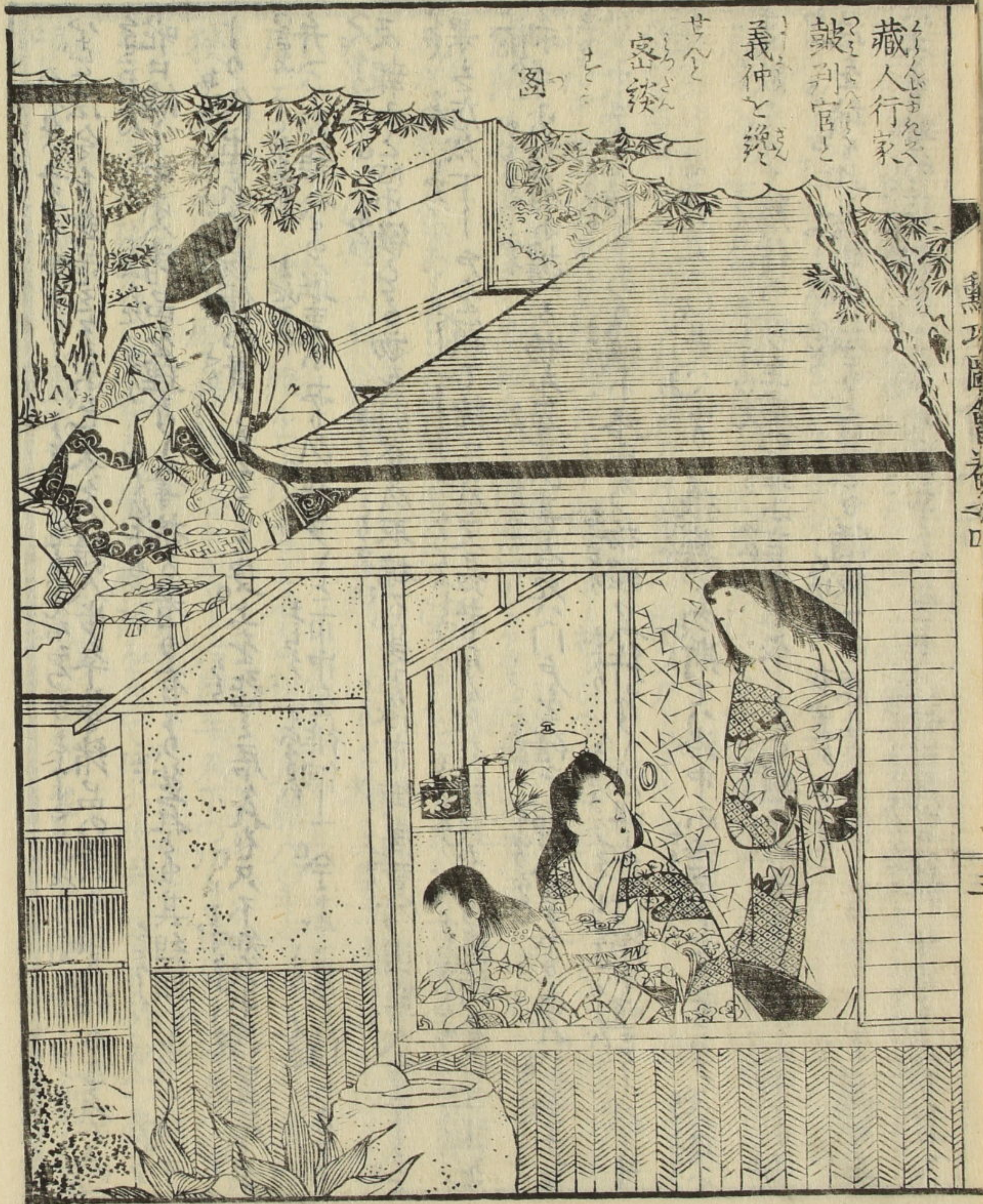
詳不中。一。の。御。更。なり。と。相。演。る。木。曾。殿。靜。賢。が。面。を。恥。と。見。上。り。仰。さ。る。と
 義仲者。ハ。高。倉。宮。の。令。旨。を。戴。し。より。以。來。九。夏。の。夫。も。甲。冑。戎。解。む。と。冬。乃
 夜。中。郊。野。不。即。て。彌。る。平。家。を。追。落。し。法。皇。の。睿。慮。を。安。ん。じ。ま。り。其。を
 聊。ハ。御。憐。れ。か。く。北。陸。宮。ハ。帝。位。ハ。進。め。む。と。判。さ。し。浴。中。の。物。價。を。上。さ。せ。義
 仲。ハ。兵。勢。を。減。し。む。是。皆。逸。奏。の。致。と。処。と。り。む。君。御。許。容。あ。る。ハ。左。右。ハ。某
 不肖を責。平家の根葉を断。今西國。下。向。仕。ハ。猶。逸。者。の。言。を。納。鎌。倉。あ。る
 頼朝ハ。義仲。追。討。の。院。宣。を。む。り。東。勢。を。召。下。り。者。ハ。其。前。ハ。平。家。の
 大。敵。を。靖。後。ハ。頼。朝。ハ。猛。軍。戎。置。進。退。俱。ハ。路。な。り。前。後。顧。る。違。あ。る。と。所
 詮。君。ハ。悪。し。き。も。り。死。と。ん。身。中。の。心。都。城。中。ハ。鎌。倉。勢。を。引。受。潔。く。戦。死
 仕。人。為。ハ。半途。より。引。及。し。即。今。院。参。仕。る。も。最。期。の。際。ハ。今。一。度。龍。顔。を
 拜。し。且。逸。者。の。名。を。承。り。遺。恨。を。晴。し。ん。ん。と。も。引。及。せ。ハ。御。不。例。と。い。ふ

詮方なり。速小後者乃名を仰更むる下と憤怒の気色面不溢をかり切さや
 されんか。許賢大系怖は二焦奏向い下とて入再度主出ヤをる。奏向の趣
 睿受小連一処院殊小わら丸思召紹一更公帝位の更公卿詮議の上皇太
 神宮の御告お任せ一処をれを丸が扱ひ針ひかさる更先達ても通りなり
 ぬ洛中物價の更も引下せたり。觸渡さむといふ。今諸道兵乱むく諸品の通
 路絶されか自然小萬物走く價の倍も更時世の不肖也。諸吏より力及をす
 況丸か知るぬあも。又頼朝追討の宣言を下せし。その更ハ跡方を死た主統之
 當世のかうい種々の雜説雜となく言觸。院中も種々の更更あといふ。勢を信
 用とる更たり。然れを維をう護者と名を指せ死。只雜人の中言をるるは遺恨
 校まて倍忠戦を励。頼朝と心を合。治國平天下の功を遂俱小源氏。果
 を量りし。紹めいと演音と。木曾殿詔を更て院の護者をらむいふと深く
 恨と更いる為方なく。最不貞氣小く退出有るるは是より快くして樂とす

ばと法令自然弛ゆる。末々の雜人歩卒等諸品の貴小困之稍もとれぬ
 唯口論一中小緒品を理なく奪掠る者も有る。然れとも其組頭の者も院中
 より仰出されて物價の貴くかると。上を悉く居れを只不知息小捨置る。あ
 弁たれ雜人ども無更小かり。我もくと市中を徘徊一。今や貴く債らき一
 及報小と心小欲とる物を引奪の取掠る。是下依市街商賈の困窮大方なると
 果之店然下一戸を鎖て諸品が交易者なれを雜兵をく道行者の衣服を
 刺手小持肩小擔る物を奪ひ甚とれハ門戸を確く押入奪ふ。あれは妻子を
 質小とりて債もあり。絨小洛中乃物強ひ絆なく。泣叫声行復小喧く。今井
 通の。是かんか。是ハ余りの狼藉多。斯てハ洛中ハ注居とる者なく。公用小
 更欽を入々。總佐の族主君の罪小言をて。と組々の者。言渡一。殿く不
 法を絨とれを稍相鎮るといふ。猶拔々小悪甚を働く者。是より。院中小
 ハ木曾勢の狼藉を安良大。小わらる。色小ハ攝内判官公朝を再度鎌倉へ



幼刀圖會卷之四



藏人行家
鼓判官と
義仲と
甘ん
密談
と

幼刀圖會卷之四

差下され急死馳上りて木曾成退治せよと命せられり

義仲焼伐法任寺殿條

却鏡十郎藏人行家八義仲と引違播列馳下りたり。平家由新中納言知盛門脇中納言教盛を始り二門の緒大将一萬余騎をく室山にて押上り行家と合戦おこさる。行家多し平家の謀中ら大ら小伐負折戸六郎重行津毛十郎有重を始り戦將十九人士卒二百余人を折た遠くの体まで敗走し和泉路へ落さる。其より河内國石川乃城へ入都の動靜を安木曾が狼藉以外の外で洛中の人民恨を憤る体なを暗小悦び壹岐判官が件(再三)謀を告遣たり。知安行家が密書を披見して大ら小伐負折戸六郎上皇小紹と奏し。木曾義仲君を怨むと洛中へ乱妨し。尚も飽くこと君を捕まりて北國(下)鎌倉勢と陣を争ふと内々其準備し。いよいよ慥小史えい。是由より死脚大事なり。所詮鎌倉勢を御待あらん

山門三井寺南都の衆徒及び畿内の武士(院)宣を回されて召聚木曾を誅伐あせられ不勢の義仲亡滅仕らん。斐治定ふいと奏し。法皇勿やう知安が膚受の懇小惑されし。義仲小膚を北國(下)向む如何なる憂苦を刀をうんと内々めて三門三井寺南都の大衆近國の武士(院)宣を賜り急死馳参りて木曾を誅し。洛中の騒動を鎮むと觸渡し。此時緒山の衆徒近國武士六邊者の所為と。木曾が狼藉を憎む最中なれ。一議も及と。領掌一緒司八省の武士六早御所(馳)参り。當所へ敵を引受る。使里惡とて天台座主明雲僧正の長衣八條宮の針ひとて法任寺の御所(院)中(院)當今(帝)初を請トなり。北面の武士(院)守護し。山門の大衆在京の武士も追々馳参り。壹岐判官知安大ら悦ぶ。自己大將軍となりて錦乃直無小具足をり。配當をな。猶も緒方の勢を催促し。木曾殿此脚惟一を安ふ。愈深く院を怨む。是皆鼓判官と叔父行家が終奏の所為之

予君の為莫大の功を立なから却て前輩小縛りて朝敵とたつる更運の盡る
期なから。今方なり法住寺殿へ押寄鼓りか須首切て腹のいと敦圍火急合
戦の準備ある。今井樋大い驚丸是六物小狂ひあふ。適奢る平家を追落
し民の水火の陷救ひあひし御身の一朝の怒小身を志ま朝敵の名被り
玉入る御思慮の足るふ似て何所中も御身小科な死より成甲敷たあ
と練をれ木曾殿潜然と涙を流して仰ら。汝達より処理なりといふも義
仲叢澤より身を起して天下の為小身命を抛し何友とや。是皆高倉宮の令
旨を辱し彼君の忍敵一院の豊妻より平家を亡し。若宮が天下の君と仰きま
ん為なり。然る小望達せざる耳あるも君絶依の言成信しあひ関東を負願負
さ色あむ予ハ進む功を成事能ふと退て身を守る更能ふと。身方小死とく
まの秋なり。法皇の御挙動を以て推量する。平家の難面くなりなりしも
一門の辟事のまもあふ。よ一人も何とも義仲小於と法住寺殿へ押寄

憎とかりふ鼓多死首刃を止しと。サハ切らる顔色あて仰る小と郎黨の
面々も俱小憤怒胸を塞だ。此上生死を君と俱小せんと牛料々とかりひえ木
曾殿満足あり軍勢集りあふ。思ひより無勢小て千五百騎小ハ過ぎ
まとも倒りて七手小配當し。前門と木曾殿後門今井郎兼平西表小捕
六郎。東手ハ根井大彌太。其外樋口望月巴女ハ其間々小あせ弱く人方ハ力を
添人と押出と。御所ハ木曾既小寄来ると言えられ公卿殿上人今更戦栗
し何となく強立堂裏に心憶とれども。王位を後掬小とる上ハ強て気
を勵し金剛鈴を揮鳴して下知を傳ふ間中木曾殿の勢四百余騎法住
寺殿の西の門小押寄。喊を嚙と造りけ前成射る事雨のこ。御所中ハ
北面の徒防笠前々射出せども。敵の猛威小怖きて腕慄ハ膝痿て墓々ハ
刃さかり。此時十月十九日辰の尅也北風をげく吹たれ北手(寄)る小捕六
郎下部小指揮して在家小火を掛れ。同刻に忽ち猛火燃小燈を頭て

御所(きりぎり)燃(も)たり。法皇(ほうわう)を始(は)まり公卿(こうけい)殿上人(てんじょうにん)官妃(くわんひ)女官(にょくわん)大(おほ)の小孩(こご)死(し)肝(かん)魂(たま)身(み)小(こ)副(たせ)を逃(に)密(ひそ)に泣(な)叫(こ)目(め)も當(あ)られぬ風(ふう)情(じやう)なり。寄(よ)兵(へい)と是(こゝろ)小(こ)機(き)を得(え)て御所(ごしょ)の門(かど)を少(すこ)破(や)り込(こ)み切(き)回(まわ)るふどいふと根(ね)根(ね)御所(ごしょ)方(かた)烟(けむり)の呪(のろ)々(ざ)小(こ)燒(や)き或(ある)は敵(てき)小(こ)討(う)ちを或(ある)は味(あじ)方(かた)小(こ)踏(ふ)倒(たお)され討(う)ち者(もの)數(かず)成(な)る日(ひ)來(き)鳴(な)呼(よ)び口(くち)利(り)者(もの)我(われ)先(ま)に落(おち)行(ゆ)む今(いま)維(い)防(ぼう)人(ひと)ととる者(もの)南(みなみ)門(かど)を閉(と)り敵(てき)走(は)る七(しち)條(じょう)小(こ)聲(こゑ)る山(やま)法師(ほうし)も勢(せい)ひの叶(な)ざる然(しか)ん。一(いち)戦(せん)ゆも及(およ)ばず山(やま)門(かど)して敗(た)走(は)る。提(た)津(つ)源(げん)氏(し)多(た)田(た)藏(ざう)人(にん)豊(ゆ)嶋(じま)冠(かん)者(もの)太(た)田(た)太(た)郎(らう)亦(また)這(こ)の鉢(はち)ゆて落(おち)て行(ゆ)き小(こ)可(か)笑(わら)え知(ち)安(やす)兼(けん)て落(おち)外(がわ)の民(たみ)家(け)搬(か)文(ぶん)を回(まわ)り此(こゝろ)度(たび)法(ほう)皇(わう)木(き)曾(そ)が乱(らん)妨(ぼう)を惡(わる)くせむ御(ご)誅(しゅう)伐(ばつ)ある一定(いちてい)敵(てき)後(ご)敗(た)績(せき)して落(おち)人(ひと)も漏(も)れさし討(う)ち殺(ころ)せよ後(ご)日(にち)院(いん)奏(そう)し恩(おん)賞(じやう)を中(なかつ)下(した)と云(い)觸(ふ)りたり七(しち)條(じょう)大(おほ)路(ぢ)南(みなみ)北(きた)の家(け)々(々)小(こ)楯(たて)撞(つ)撞(つ)待(まち)けし今(いま)御(ご)所(しょ)方(かた)の武(ぶ)士(し)追(お)々(々)落(おち)行(ゆ)を借(か)り木(き)曾(そ)の落(おち)武(ぶ)者(もの)とと散(さん)々(々)小(こ)射(や)る落(おち)武(ぶ)者(もの)は是(こゝろ)も木(き)曾(そ)の伏(ふ)兵(へい)と心得(こころえ)殊(こと)周(しゅう)障(じやう)し道(みち)を横(よこ)切(き)る落(おち)るものあり

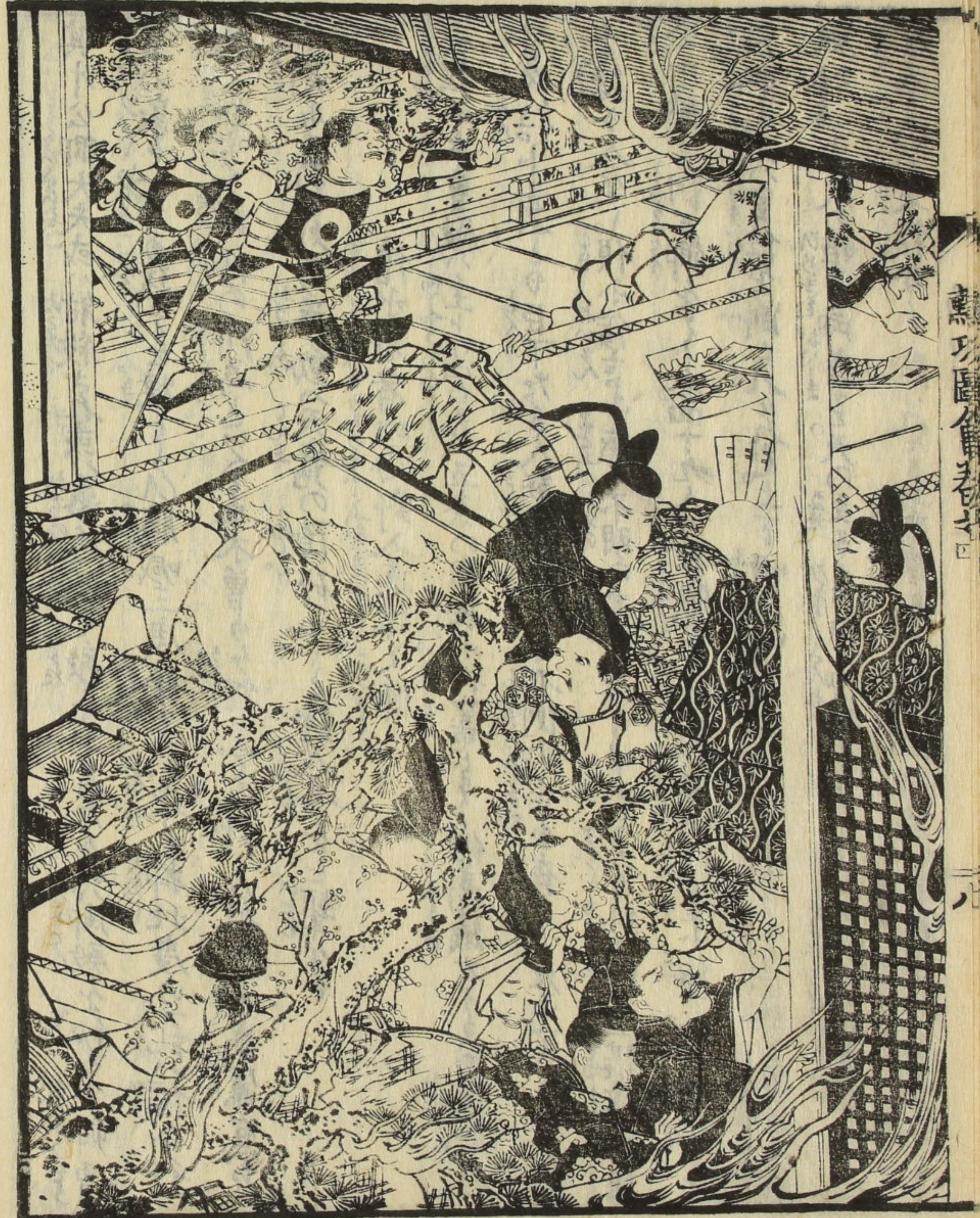
強(たか)く通(とほ)るんて射(や)殺(ころ)さるるも身(み)たりけり誠(まこと)小(こ)なれ知(ち)安(やす)が慮(り)急(いそ)なり種(しゅ)々の僻(ひが)成(な)り引(ひ)出(だ)しと薄(うす)情(じやう)なり法(ほう)住(ぢ)寺(じ)小(こ)木(き)曾(そ)殿(てん)采(さい)配(はい)採(さい)諸(しよ)軍(ぐん)小(こ)指(さし)揮(ひ)し法(ほう)皇(わう)上(じやう)の御(ご)車(くるま)とるるを令(れい)示(し)し宿(しゆく)所(じよ)へ渡(わ)御(ご)を進(ま)せよ鼓(こ)判(はん)官(くわん)とるるを何(なに)國(くに)ゆても追(お)蒐(そう)て生(な)捕(と)りしと弛(し)回(まわ)り下(した)知(ち)せし知(ち)安(やす)人(ひと)より先(ま)に八(はち)条(じょう)河(か)原(げん)をさして落(おち)々(々)金(きん)剛(かう)鈴(る)を棄(す)てゆきと落(おち)る程(ほど)がとくと鳴(な)り知(ち)者(もの)有(あ)り彼(か)鈴(る)持(もち)者(もの)を鼓(こ)判(はん)官(くわん)より借(か)りて我(われ)虜(ろ)人と追(お)蒐(そう)るふど知(ち)安(やす)大(おほ)の怖(おそ)き急(いそ)小(こ)鈴(る)を投(な)捨(す)馬(うま)を乗(の)り放(はな)し落(おち)行(ゆ)勢(せい)小(こ)紛(ま)れ危(あや)し命(いのち)を助(たす)けり茲(こゝろ)小(こ)痛(いた)りたり天(てん)口(くち)座(ざ)主(ぬし)明(めい)雲(うん)大(おほ)僧(そう)正(じやう)馬(ば)小(こ)乘(の)りて落(おち)ゆひと流(なが)る前(まへ)來(き)つし腰(こし)の骨(ほね)を強(たか)く射(や)る小(こ)射(や)り馬(うま)とふたり落(おち)ゆを雜(ぞう)兵(へい)等(とう)折(お)重(おも)て御(ご)首(くび)取(と)り八(はち)条(じょう)宮(みや)ゆ乱(らん)箭(せん)の殊(こと)小(こ)出(だ)家(け)得(と)道(みち)し修(しゆ)学(がく)の窓(まど)小(こ)螢(えい)雪(ゆき)を聚(あ)り顯(けん)密(ひそ)の学(がく)小(こ)心(こゝろ)身(み)を凝(こ)して

力(ちから)刀(た)圓(えん)會(かい)後(ご)口(くち)

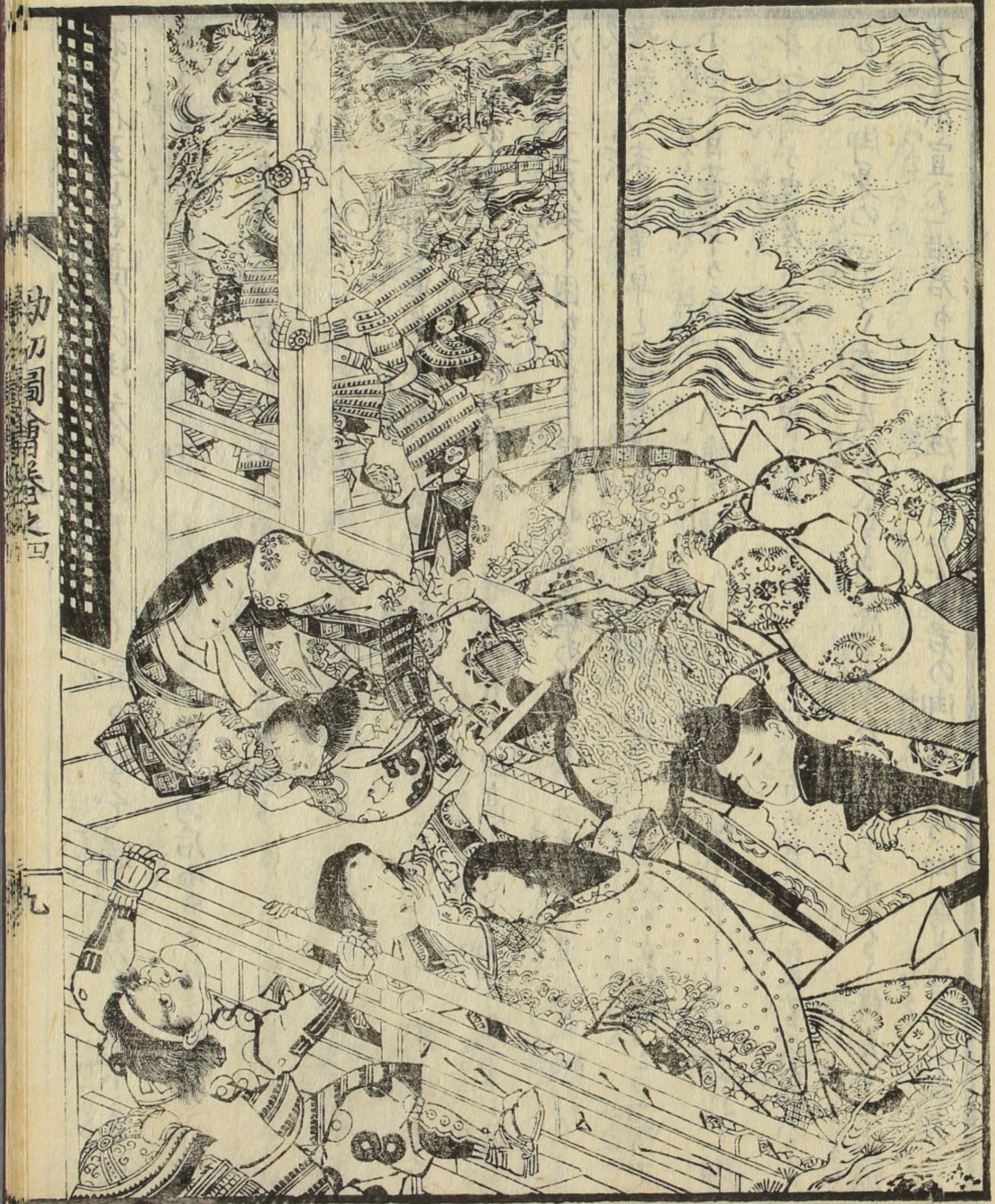
台金兩部たうきんりゆうぶの眞言まごんごん成悟なりあきら。圓頓えんどん実相じつじやうの止觀しくわんを究きめしひ法德ほふとく官階くわんかいとも小尊こそん
 丸御身まるみみなるなり成なり龜門かめもん原上はらの上の土つち小骸こがはを埋うづめし宿因しゆくいんの終はつるる處ところをを傳つたへしるる
 恐おそるる丸御身まるみみなり。御室みむろの宮みやも御心地みみち惑まどひひ逃にげるるる處ところをを傳つたへしるる武士ぶし漸しだしし御車みぐるま
 小召こめきせしるる落おちししるる。根井ねい大弥だいや太弓たゆみ響ひびける既すでにに射やりしるる人ひとともとも成なり。今井いまい兼平かねへい
 如何いかししてて知しりる人ひと彼あれ仁王にわう寺てらの宮みやを過あまりとと制せいとと。根井ねい儲ぞははとと矢やとと弛ゆるみみ
 多おほふふよりより危あやしし御命みこと成なり助すけりり。法皇ほふみも御み裏うらもも豊後ぶんご少将せうじやう宗長むねちやう一人ひとり御み供くわ
 て落おちししるる成なり武士ぶしどもども八方はつよりより矢やを射やりしるる。宗長むねちやう高たか声こゑ小こ是こゝはは法皇ほふみの御み
 渡わたるるとと狼藉ろうしやくななせせとと呼よびよびよるる。八嶋やしま四郎しやう行綱ぎやうきやうといいふふ者もの儲ぞ八天はつてんの君きみを過あまりとと
 急いそぎぎ小御車こみぐるま小召こめきせしるる自己じこ守護しゆごして五条ごじやうの内裏うちうらへへ入いりる。主上しゆじやう六むちち七しち条じやう侍従じやくじゆん
 信清のぶきよ紀伊きい守範しゆはん光唯みつただ二人ふたり守護しゆごしし泉いづみ水みづの小船こふね小乗こじやうとと潜ひそみみ居いるる成なり武士ぶしどもども見み
 付散つきた々々小矢こやを放はなつつ兩人ふたり主上しゆじやう小覆こおほひひくく。是こゝはは幻まぼろ帝てい少せう御座みまるる何なん条じやう尾お龜かめ
 ををななししるるとと叫こゑぶぶ儲ぞははとと弓ゆみを止とめめ虜ろなりりてて閑院かんいん殿でん行ぎやう幸きやうなりりとと

其外そのほか公卿くわうきやう大夫だいつ或あるハ射殺しやくされる或あるハ落延おちのび敢あてて敵てきともとも者ものななれる御殿ごでんを初はつめめ公卿くわうきやう僧そう
 官くわんの家いへ々々一字いちじもも残のこりるとと燒やききししるるハ勝かち喊げん三度さんた揚あげる引退ひきひくく抑おさめめ此度こゝろの二ふたハ偏ひとへ小行せうぎやう
 家いへと知安ちやすかか誤あやまり傳つたへしるる所ところ為なりる木曾きそゆゆ程ほど中なかか計はかりりししるるもも思慮しりゆ有ありる
 小斯せうしまりりの外ほか乃すなはちち奉勅ほうしやくハ天てん魔まの障さやりりとと諸人しよじん眉まゆをを擧あげる
 清水しみず冠かん者もの以もつてて海野うみ入道いりだう練れん又また條じやう
 去程きよほど小本こほん曾そ殿でんハ主上しゆじやう法ほふ白はく五ご条じやうの内裏うちうら小押こおし竈かまどよりより儲ぞ高たか儀ぎ有ありるハ君きみ終はつ者もの乃すなはちち
 言こと成なり信しんトともも臣下おんげなるる人ひと能よくく練れんままとと不測ふそく御み企けむむ在ありるハ一人ひとりもも君きみの非ひ
 を練れんるる人ひとなくく。俱ともハは倭やまと言ことハは惑まどハは不明ふみやうの甚こゝろとと夫それ々々糾きり向むかひひ上かみ攝政せつじやう基もと通とほ
 公くわう中納言ちゆうなごん朝あるる御みををとと。四十九しゆじゆ人の官職くわんしやくを止とめめ其外そのほか罪つみの輕重けいじゆう小依こよてて或あるハ所帶しよたいをを
 没収ぼつしゆうしし或あるハ官位くわんゐを削くげるれる上下じやうげ慄おそひひ怖おそれる安やすたた心こゝろハはけけりり。五いつ人にん前まへ関せき白はく松しょう
 殿でん公くわう房ぶどう一人ひとりの姫君ひめきみ御座みまるる天てんのの主しゆ美み貌ぼう端たん悪あくなりり。天晴あまはれる女むすめ御み更さら衣ぎ少せうとと
 具ぐんんとと未ま頼たの母ぼハは思おもははれる。木曾きそ殿でんハは彼あれ姫君ひめきみの美み貌ぼうを皮かわ不ふ見み意いハは

和能
が
法
住
の
御
所
焼
討
と
る
図



薫
功
區
備
卷
之
四



幼
刀
司
備
卷
之
四

あゝれあゝれも高位の御方乃姫君なれど言申出さず過一むひさるお不意此
度の擾乱出来なれば基房公深く憂むひひて國王の后のゆとありひひひ姫君
なれども木曾が意慕ふと幸ひ渠小とて君成困りまらさるや針の如く北
方とも示し合せ玉ひ姫君を密に御膝本招起仰せ今般木曾義仲一時の怒
小乗一君成押籠まり公卿の官職を止朝廷を乱るといふも君小御過りま
さぬあゝれもこれ義仲此時小乗一嵯峨小在と故高倉宮の御子成帝と仰れ
法皇主上成永く困りまらた小あゝれも然ありて天下の大乱王道の衰微たり昔
漢朝乃末小董卓とり者漢帝を押し籠り困りたり成司徒王允が女貂蟬といふ婦又
小勸て自董卓を妾とかり種々練て漢帝の側を救ひたりと云然れも御
身貂蟬が忠孝不效ひ木曾の妻となりて渠が心成者君の御憂苦成救ひまら
ま是御身の心成く天下成安んまら大忠至孝なりお花承引く嫁ひり涙
かゝる小宜を姫君もいと泣むひながら君の御為又乃御為と侍る木

ハ疎いさる鬼畜の國も往侍りあんと最中さく宜ふと又君大悦びひ
使者を以て姫君を贈りたたり成仰遣する木曾殿是成皮ひひ諸々基通
公息女を餌として法皇の押籠成救ひまらん謀たりと知ぬとも原來法
皇成久く困りまら死所存なれを快く領事あり頭て良辰を擇み松
殿の姫君を迎へたりあふお花承引く佳人なり玉貞朱唇画をまら花柳
腰婢婿とれむ心十分悦び朝夕の愛憐決まら姫君も木曾といひ如何なる荒
夷ふやと兼てと悲しうくお花承引く其入を見ぬを白面秀眉相顔堂を
威風凜凜たる將相かろふと深く心小嬉むひ入奥の多より雲雨の契濃むて
さあろ膠と漆のてくなり松殿ハ練成就とて是より木曾殿小押籠ひひ
法皇おひ諸卿の更成種々歎れ者ひひるも木曾殿も院乃發奏を信じ
お花承引くお花承引くお花承引くお花承引くお花承引くお花承引く
大夫業忠が六条西洞院の別業行幸なりなり官職を止る公卿を忠

原乃官復もと自巳院みづの忝はづかして罪を謝ゆるしむはり。是この依よて君臣始はりし愁眉を
ひき。又またの十二月十三日除目行とき義仲を左馬頭兼伊豫守さに任ます。院の御殿別
當あり。丹波國五ヶの庄を御加増ごある。木曾殿深ふく天恩を感佩かあり。此上
い急ま平家を亡なして三種の神雷を還幸かなり。院の層慮を安介あしむると
種々思慮を回まされ多おふ。此即平家八備中の水嶋播磨の室山む二ヶ度の合
戦せ勝利を得てより。兵勢追々加かり。知盛教経の両將威武を逞たく。中
國を政靡せいし。山陽道南海道さん十四五ヶ國を斬從き。其勢十萬騎あ余あり。と
ある。義仲深ふく歎息あり。我疾わゆ西國せい下向げし。平家を伐うたむ。根を
断たり。枯くさん。安あり。多おふ。の。後の者の小せ妨たらし。或ある鎌倉勢上洛きとの虚説
小遞せまで。日月を過す。敵か小せ多おく。兵勢を付つり。今いま輒さ制せいし。不ふ如に得ずて
平家と和平へいをなし。神雷かみを過あり。還御かり。なり。後寛々追討のちせん。と
思慮しを定さめ。奈和な太郎長利なを使者し。て八嶋や下さし。和平へいの義ぎを討うら

平家も容易やす小是を信まず。往むかしの使者し五六度ご及およびぬ。此この
早はやく世よ上の洩あ木曾義仲きと平家と合あれ。京鎌倉き攻せ亡し。安徳あ帝みを重
祚せ進しんせんと。練れんまり。と。跡形あとを死し。言い出で。程ほど小せ大虚だいを吐は。大実だいと
傳つたる。乃すなは。洛中洛外らく此こを。絶たり。者もの。時ときを得え。法皇ほう。密ひそ送く
鎌倉かへ。言い送く。ぬ。佐殿さ。大だいの。強か死し。木曾き。狼藉ろう法ほう小過せ。上かみ。法皇ほう。三
上かみ。押お。木曾き。合あ。由ゆ。死し。大吏だい。今いま。急き。小せ。殊こと。伐た。せん。叶
い。思し。れ。多お。木曾き。由ゆ。断た。せん。と。表あ。鎌倉か。勢せ。上洛じやう。木曾き。と。平家
へい。平家を追討へいせん。と。小せ。押お。上かみ。流りゅう。言い。千騎せん。出で。ま。せ。て。八呼は。及およ。二に。千騎
出陣しゅ。ま。せ。て。引ひ。及およ。せ。て。吏し。を。練れん。密ひそ。小せ。不ふ。意い。小大軍だい。木曾き。及およ。平家
へい。と。案あ。れ。多お。小せ。清水しみず。冠かん。者もの。義高ぎ。去い。ぬ。多お。壽永じゆ。二に。年ねん。の。春頼はる。朝あ。義仲ぎ。和
平へい。乃すな。砌せき。人ひと。質しち。して。海野う。小せ。太郎たろ。と。俱とも。小鎌倉か。へ。赴か。れ。多お。が。佐殿さ。是こ。を。受あ。り。て。息
女め。大だい。姫ひめ。小せ。娶めと。り。親おや。多お。多お。小せ。より。義高ぎ。由ゆ。佐殿さ。を。実ま。の。又また。と。敬うや。ひ。傳つた。死し。又また。王わう。の。礼

義を盡されたるは又木曾殿都(先登)て平家成追落し玉ひより佐殿深
 く其功を妬む誓約の背く成憤らるを見受ぬ冠者独心を困れ六神佛小
 祈誓して難又実又の和平成祈られざる其甲斐なく鎌倉口日々小燃ふなり
 鎌倉殿の疑を増さ有法住持殿を焼伐ふ貴族門跡を皆帝法皇
 を押籠諸卿の官職を止削(平家)と合体も所悪統のこまゆ義
 高も今八疑心を生し。諸父君天魔魅せられ乱行をなす今
 我身も如何なる変事あるか針がごと世心憂思うれたる去りて子も身
 の父の非を練さる不孝の第一なりと信別も海野入道兼保を竊招寄
 意云々京都(上)さる入道も義高の孝義を感し忍て都(上)木曾殿より
 縋くやも備中御曹子義高公の御吏鎌倉へ入ひ後鎌倉殿少御電
 愛深く大姫君小娶一実の御子乃て見披ひ依て御曹子も佐殿を実の
 父君と敬ひ朝夕孝順を尽し玉ひ北國の役御勝利の後以前乃誓

約成守上二懸鎌倉御通達有る所其義をく押て御上浴有る一深た御
 軍慮もゆれぬ人の功を妬む非成奉八世人のやうひも御自立の御企も
 在る鎌倉殿(後)言中輩多し佐殿の御気色耳も法住寺
 殿成焼至り平家と御和終有る御事八偏小天魔の所為と御曹
 子の御歎大方を願く鎌倉殿と御和睦ありて俱平家を追討
 かり玉御曹子ゆれ愚老小宣ひ父の御意も義高と頼朝(誓)成
 せん内縁おひれ斯りてをひり玉も勢多然してはいと御入言
 の役も故帯刀先生悪源太小討き玉保元小為義朝小斬き玉世二口の
 端も源氏八左右門姓軍小身を果とよと浅猿丸悪名成称小鎌倉殿
 と父君と敵と成む弥武名の瑕瑾と是の歎く仰ひぬ御若年小
 似えなく理乃至極を盡し仰ひより入道も不覚の泪小袖を絞ひひ可
 憐御曹子の御孝行を由皮食令ら玉且故兼遠忠義をも思ひ出され曲

て鎌倉殿と御和平ありて俱々天下の擾乱を拂ひ去り涙を流し詔を盡して
 てと練々此入道公兼遠が親族にて木曾殿成八才の年より頼朝二十五才まで
 守兼も思人なれども木曾殿も他なくとも思召具清水殿の練も悉く理の中
 まこと不覚落泪して仰るる若年の義高が孝心といひ老実の和殿が風練骨
 小深て覺ぬ然るる義仲が太急小都押上り平家成追落せし強き自
 立せんとの心もあふも若必勝の鋒を絶鎌倉へ通達小及なく其裡小平家
 法皇皇子成捕まりて西國へ下る筈に然有て八予も頼朝も朝敵の名を蒙
 りて急小平家成征伐し之を兵書小も將戦場小臨で八君命成用よふ所
 ありと縋り況予頼朝が臣下なると何ぞ素を憚り勝る軍の図をどう
 ぞべた頼朝先へ都へとも予方へ通達し安閑と待合しとく又法任寺
 殿を攻破し事八叔又十即行家鼓判官を人の傍賊迹形を先言成り人
 院を惑して山門南都の衆徒をうらひ幾内近國の武士を集めて強き誓

城を企予小朝敵の名を被りしは是予が不運の致と処とくとも空しく予が
 東て殊戮を待たぬあふされを已更成不得彼判官が首を人々と法任
 寺殿へ押寄し小目指敵判官へ封漏し天台座主八条官かんと乱前の下
 小命を落ししひぬ是我が過小似く実と判官が所業なり其後二院を
 押籠まり公卿の官職を止りし以後神後成遠ざけし御心出来させし
 事と假小針ひのえ我何ぞ清盛が暴悪小效死程なく君成出りなり公
 卿を原の官位小復し罪を謝しんむ君も御心解家小於て先蹤を官位
 成下ししひぬ且亦平家と和平成謀し更ハ我行家ホウ奸針小妨られ西國
 下向延引の内平家八山陰南海二道成攻靡兵勢稍屬て二戦小亡し難し若
 天運小合ひ伐勝し彼徒幼帝成守護し神益をとりし新羅高麗へ落る
 小拍叶ぬ場小臨し神益を破却して捨小神代より相傳の國室此時小失て
 萬國の務を引人吏を慮り和平して神宝を無事小還御なりし人あり

義仲
松殿乃
姫君と愛
遊真乃
図

勅初圖會卷四



勅初圖會卷四



の秘計なり然も如何なる事の爲めと程の事悉く後継の
毒舌小く不忠となり君も疎まれ世人の疑り朽惜き但し是も定
まれる氣運ありて有る其故ハ予君冠の頃母小死別し悲歎の余り須原の
觀心房小女人成佛の法を問ひ次彼僧ハ未前を見通と相者と云予相を
見せし小色氣不顯徳と相ありて大の尊くんととれを命短し只三ヶ國
四ヶ國の王を長壽かぶつひた其餘彼僧が教示せし事今日より
毫も違ふ事なり然れ我身の上今頼朝小膝を屈し彼が下知小徒四五ヶ
國の王と成て天然を保せられも大丈夫者豈命惜し人の膝下り腰
を屈むべし只此上六將軍宣下が蒙り平家もあは頼朝もあは蒐向く
漢く戦死せんを我本懐かれ御辺が忠練冠者か孝義ハ死とも志るる
と義仲聊も不忠を存せざる旨を義高小言度し後乃又を又とととの
本文小なるの頼朝小能事へ予が更ハ心頭小挂る更勿きと能々教訓の事

入かりとちひ切て仰せられ入道も至極の道理小返と刻かく涙涙と有る
が稍泪を推拭ひ然思召の上ハ愚老か左右中命死ふむと去たる家名を相
續し又母の遺骸を害破さるハ孝の道と申す只永久の御謀を願へ
くいと刻むく小練中御暇を賜り再び鎌倉を下り

義仲將軍宣下并緒方配當條

光陰流水のく其年也暮壽永も三年と改りぬれども乱る世中と朝
廷の政勢も墓々ハ行れども只其形むりの式部會次たり其正月六日
小義仲を正五位下叙せられも木曾殿攸況有る心小思召上ありける
松殿小就て將軍宣下の義を願ふは多小院も頼朝が差置義仲將軍宣
下の更如何あんと睿慮を悩し更にも此義執せぬおひくハ義仲下如何
から玃支を引出さる計を曲く其心を省むる為小と内月十日遂小征
夷大將軍の宣旨を下されぬ木曾殿多年の宿望達しぬと雀躍して攸ハ

此上六延々平家の及答待侍より西國下向して門を下り神蓋を還河成
 たり天恩を報しもん其心構有るるが逸臣十郎行家河内死河内小在八西
 國下向の虚を考へ又如何なる逸奏を企人知ざり不如先手始彼無道人
 を誅後安くせん小へて樋口次郎兼光小五百騎を授て河内へ差下さる是正
 月十七日の事なり然る小其翌十八日近江路遣されける間者より急馬到着
 鎌倉勢美濃園中て押上りしより風統仕ゆより何の爲の上洛せしとせ合
 一いへ平家追討の爲と言觸し九去年園東饑饉小因兵糧乏し其
 勢千騎小過ざる由小いと注進と木曾殿史小以諸頼朝予が一手少て平
 家を制せん事成妬も俱小西國下向せんも幸ひ身方當時不勢あり
 鎌倉勢と謀を合して下向せん予が望む処なりと何心なく御座る是と運り
 盡る端なりと後小とかり合されたる諸其翌十九日未の魁むり小再度江列
 より早馬をとつて敷浪のちと注進しるる八前小鎌倉勢千騎小不足と

言觸し小処能承りしを鎌倉殿の舎弟蒲冠者範頼源九郎義経の兩将六万余
 騎を二千小分大手八範頼を大将として美濃路より瀬田小向以搦手八義経と大
 將として伊勢路より大和を徑て宇治へ向し就中一太史八平家追討と唱いとも
 其実を當家征伐の爲の専ら構て御油所小と告多ふを大丈夫乃
 木曾殿も大のふおるをひ諸頼朝が謀小出板せしり今身方不勢をれを逆
 も其大軍小拒敵ざり然れむとて手成空うして敵を都へ入人も謀を似しり
 いさや手賦せんとして火急小緒軍が集へ仰多る今般鎌倉の兵傍佐身方無勢の
 虚見透し大軍成りつる宇治瀬田より攻上るより是義仲が一生懸命乃軍
 たり斯集會せし緒士の中小も鎌倉勢小言人妻を如何とかり一輩も有べし
 其後小心置なく敵勢小弛加つるも又小自困へ歸るとも面々の心小任とべし義仲小
 於て聊恨とせむと予と俱小有無存亡の軍せんともかり一輩八骸を戦場の塵と
 かり小定て出陣せよ源家は姓の令戦小未練の挙動して鎌倉武士小笑はる

更なるを仰ぎ一座の面々を音小。大將軍の必死の御合戦小推し心憶しいぎ
 爛熳しく討死して知遇の恩成報しき人御意を安んじんと意気洋洋と
 て暮らり中も四天王の一人擁六郎近忠進み出て中々此度鎌倉勢上洛兼
 てより當家追討の院宜を蒙り故めてい登し。法任寺の合戦以後主君ハ
 別心在さざりとも一院をち公卿之心を鎌倉へ傾け表當家を重んずる体
 を示して官階を進め領地を増し。油断の虚を以て鎌倉勢を招き上り人巧
 かも更鏡小くけねど頭並なり。當家も推して頼朝追討の院宜を賜り牛
 角の威を張て二戦し若敗せん一院幼帝とも小虜となりて北國へ退死峻阻小倚
 て立置電王もハヤハ容易小亡いづ然して鎌倉と當家と平氏と漢末の呉
 魏蜀小效ハ鼎足の勢を張連を天小任せ。御合戦ハ席を拍て中々小緒
 士曼を生て俱小恨気宵を衝突近忠のハもヤたり疾を然とるハと異
 口は音小回々を木曾殿制し。ハ予も其心付さるハあまされども元来法皇

八天の生る明君かれども幾俊の臣下君を啓惑し。予が苦忠水上の泡と消るの
 然る院を怨もまらぶれあむと。又君無道なりとも臣ハ臣の職を守る社
 道を夫將より者の軍小臨や勝も敗も天數なり強ち君を虜なりて敵
 小勝なれ小あむと。義仲やいの者君を貸小虜なりて軍せらるハ。未代
 中々の唾笑を引んと弓箭の汚名どく。予も然る妻小ハと無益の長せん
 議して敵小切所を越えてハ叶や。先瀬田の手ハ今井四郎兼平。方等三郎
 義弘大将として八百騎あて向ひハ。宇治の手ハ根井大弥太親忠擁六郎近忠
 進六郎親直其餘仁科高梨が徒三百騎あて向ひ如斯く。予もハ成りけハ敵
 を喰止。ハ予ハ残る馬面の兵をとりて洛中小聲。機を以て弱く人方ハ加勢す
 ぞ。と下知。院の傍護小那和太郎弘澄小百騎の勢を属て北常の妻ハ防
 かせらる。是小依て列士持。ハ地向中も擁六郎那和弘澄小耳録々々ハ主君
 こそ武の道を立貫て前のて。宣いも法皇の睿慮公家等の所有余り。

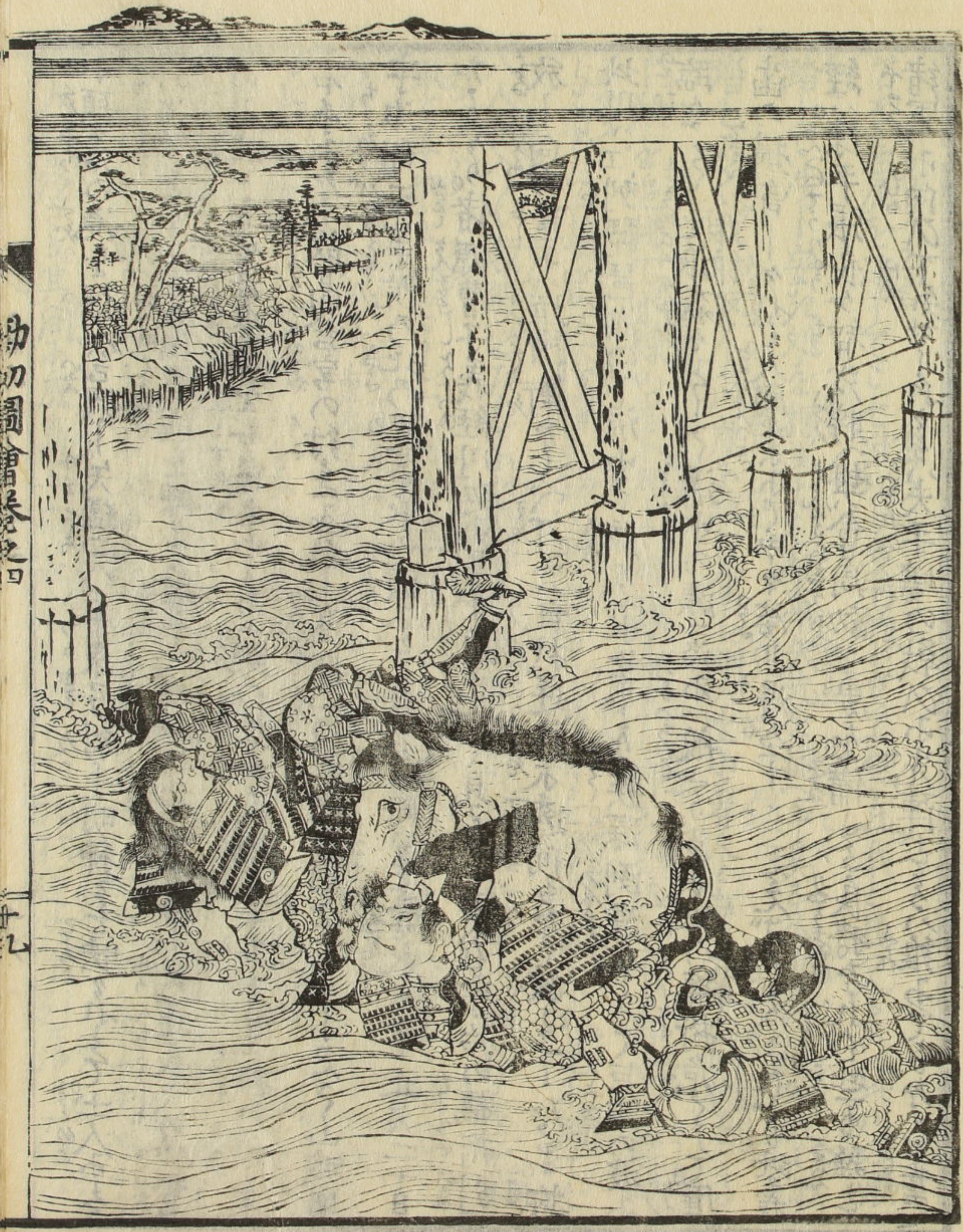
悪し御辺御所を守護し万身方敗せしときらた強て法皇が車に乗せ丹波路へ落しませ我々主君を勧て戦場を啓れ再度の合戦を企てし言合をわむ弘澄大い悦ひ是我意と比れ謀かりと承伏し別きて面々が持口とて

宇治合戦 根井退口武勇條

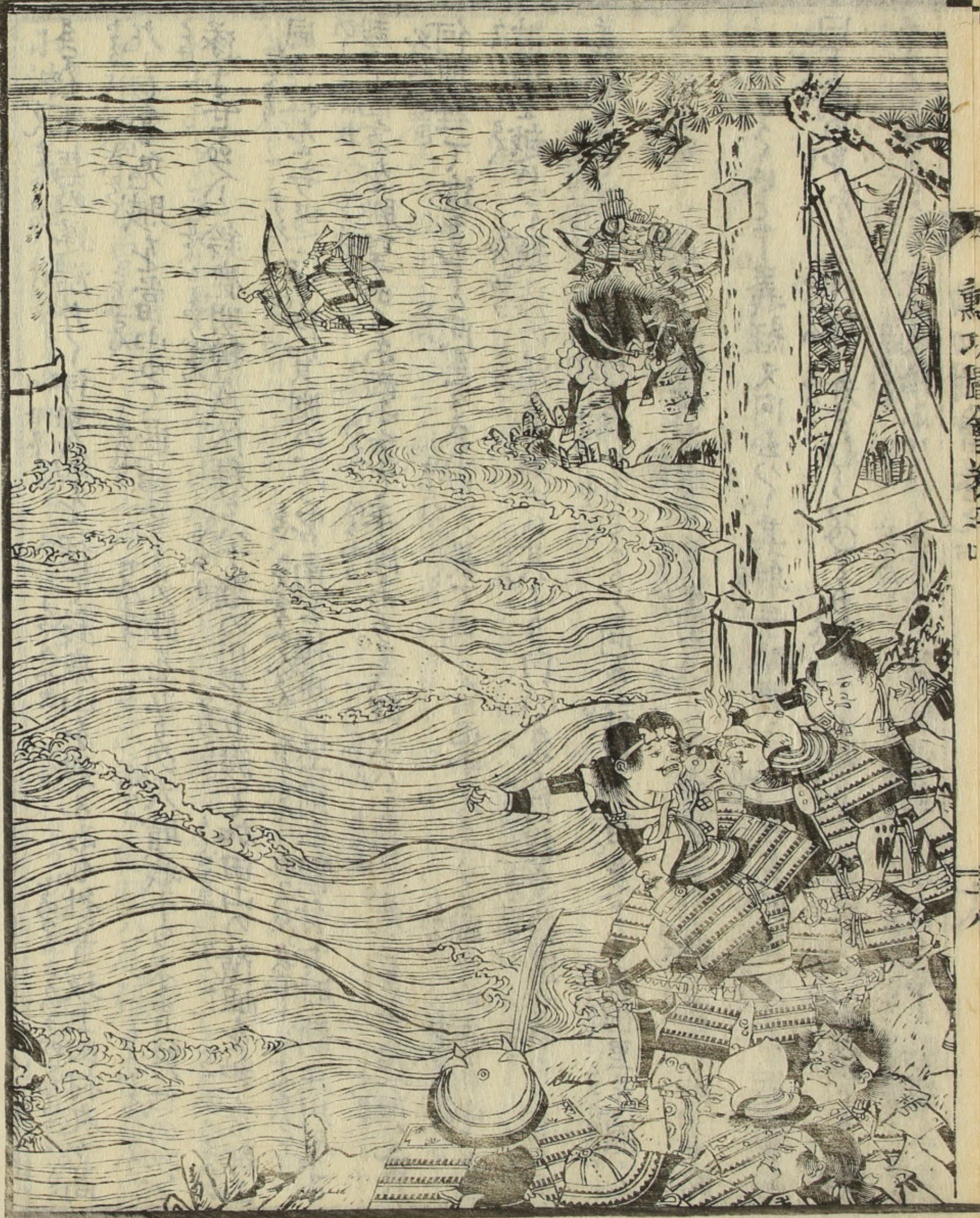
却銃鎌倉小兵佐頼朝久々木曾が成功を妬み悪しんをいり関八列乃人心いさ定やうされ自己上洛あらん吏由能ふ大江廣元北条時政等と謀と合し京都の公卿亦賄賂を贈りて内々木曾を諒せしめられし其謀因中義仲浴中成乱妨し遂に朝敵となり法皇公卿を困むる由申入し久暗小笑を合やうく処小本曾が追討せしめし院使再度小曾をいひなれ今黙止せぬ小あらんと舎弟蒲冠者範頼源九郎義経兩人を大将として六萬余騎を附屬し本曾追討のめ小上洛させし是小依て範頼八尾張より美濃辰路小浩り義経八伊勢より大和小を宇治の手向れ多々が究て気早死大将か

まふ軍馬の遅滞なく伊勢路を徑て鈴鹿山を越るも往昔坂上田村丸が高九としる鬼賊を當山して退治せし先蹤をかりて天晴我亦木曾殊伐の功と遂にせせしと鈴鹿明神伏拜し八十瀬の川を渡り加田山の險阻を越倉部山風の杜を歩過は伊賀國の一宮南宮権現の堂前小頼付女時新庄川原小聲て四方を眺望ある小西小方て平岡あり義経主人を招て是より宇治向くハ何地往て近きと問をさる小里人畏て曰さん西小見えし岡をま吉田山と申彼山を越ぬと頼朝の滝と申処の其より向ひし行程余程近くいと申上る義経度て沈吟し其他小路有さうと問ふ彼男又曰是より長田里花園と申所を巡りて射手大明神を過り笠置小浩り通里を路へ遠くいと申路次垣をくいと申義経又問む其射手明神と何なる神哉祀するぞ彼男が曰下賤の身なれ神射は知さむいと申も文字を射手と書を何世の頃より射手とせりと古老の物語小皮いと言上とて義経彼等として曰予ら戦場小向

島山 重忠 妹力 宇治 川を 渡つて 図



功の圖會集巻之四



重忠の圖會集巻之四

小頭落の滝を徑入心平。矢猛心の手束弓射手明神と快多とて土人ふと引出物をとせ長田花園を興りて射手大明神の前小下馬。武運長久の祈誓ありと其より笠置寺を歩過名ふあ野原和永河を歩こり。柝の杜を右手ふり。故高倉官の封をひり。高明山の花表の前を左手ふり。山城園宇治郡平等院の北乃辺富家の渡ぬと著し時具壽永三年正月二十日ありたり。儲源曹子義經川辺小馬を乗出して見たり。武治の橋折引放し向の崖の垣撞衝かへ。汀小乱林近茂木透間ゆなく植りて。抑此川ハ江列琵琶湖の下流中々流る水笠前より疾深淵潭々として巨海の波小臨か。浪水森々として瀑水の漲落小一般。虹の橋折危くして雁齒の構奇く。人問業ふて中々涉り得る。良將たれを此二強と經平張良か智茂時。樊會周勃が勇を備ふる。良將たれを此二強と緒軍小向小下知せ。夫平場の戦ひ先陣とる。八難あてもか。と世業

くる急流を涉してこそ武功も手柄もいふ。我と思ふ。此川の瀬踏して涉し安れた処を探さ。心敵軍矢先を揃へ手具も。曳待体たれ。瀬踏と刀を我射取んと川崖小臨む。剛の坐お着る。八輩八橋折をこり。敵を追拂て水練の者お思ふ。瀬踏させよと仰せ。佐々木が郎黨小鹿嶋と市とり者。胃脱捨腰小鎌と短刀。益を浪向。飛没ぬ。是お續て七人入り。瀬踏をなす。案のどく木曾方小須波敵軍の瀬踏と。射取て手柄を顕せよ。十騎許渡羅々々と川崖(弛出)り。此時中々鎌倉。の中小平山武者所重季高。宇治川跣路の先陣。我なりと呼。橋折つ。猿猴の。橋折を。歩渡る。續て佐々木太郎定綱。渡り。允重助熊谷次郎直実。子息小次郎直家。亦。危。橋折を。渡り。指取引。結散。小射る。程。木曾殿の郎黨。兼助。矢場。七人射。其間小鹿嶋と市。水底を潜りて。乱林。引落。大綱小

物切圖會卷之四

十一

綱を勇捨て浮出此方の崖(遊)及リを天晴(晴)量(量)の者(者)やと感(感)せぬ者(者)八元
 リたり。然(然)れとも緒(緒)軍(軍)ハ猶(猶)たちらへて見えぬ。畠(畠)山(山)次(次)郎(郎)重(重)忠(忠)馬(馬)を
 出(出)して曰(曰)抑(抑)此(此)川(川)ハ名(名)ハあゝ急(急)流(流)なりと云(云)ふも馬(馬)中(中)ハ浅(浅)むこそ治(治)承(承)の合(合)戦(戦)ハ田(田)原(原)又
 太(太)郎(郎)ハ先(先)陣(陣)ハかいつま我(我)を手(手)本(本)ハ渡(渡)耳(耳)殿(殿)等(等)と川(川)崖(崖)ハ臨(臨)む所(所)ハ名(名)ハ五
 花(花)の小(小)嶋(嶋)ヶ崎(崎)より二(二)騎(騎)の武(武)者(者)鬼(鬼)出(出)て川(川)波(波)ハ釣(釣)を綱(綱)と乗(乗)へる。畠(畠)山(山)脛(脛)と是
 を見(見)れば一人(一人)ハ佐(佐)々(々)木(木)四(四)郎(郎)左(左)衛(衛)門(門)高(高)綱(綱)一人(一人)ハ握(握)原(原)源(源)太(太)左(左)衛(衛)門(門)景(景)季(季)なり。借
 鳴(鳴)呼(呼)の者(者)等(等)なり。我(我)ハやう芳(芳)多(多)と云(云)ふ。馬(馬)より肉(肉)と飛(飛)下(下)馬(馬)の前(前)脚(脚)ハ人(人)が
 看(看)み掛(掛)け遊(遊)しつゝ浅(浅)里(里)多(多)る。是(是)ハ小(小)属(属)され我(我)ハと浅(浅)む中(中)ハ武(武)藏(藏)國(國)の
 住(住)人(人)大(大)串(串)太(太)郎(郎)と云(云)ふ者(者)重(重)忠(忠)ハ後(後)まかと引(引)搥(搥)てこりたれども水(水)勢(勢)石(石)を流
 こと許(許)強(強)まれ既(既)ハ推(推)流(流)されんとせしが幸(幸)しく重(重)忠(忠)の草(草)摺(摺)ハ取(取)付(付)ぬ重(重)忠(忠)ハ
 是(是)をちと遊(遊)行(行)ハ漸(漸)ハ鎧(鎧)の重(重)く覺(覺)られ背(背)を額(額)ハ黒(黒)皮(皮)威(威)の胃(胃)著(著)る
 武(武)者(者)我(我)胃(胃)の草(草)摺(摺)ハ取(取)付(付)て在(在)重(重)忠(忠)怒(怒)る。已(已)ハ何(何)者(者)かれ我(我)を妨(妨)るそ名(名)と称(称)
 せしむと敵(敵)陣(陣)ハ投(投)上(上)んとぞと叱(叱)る。彼(彼)者(者)曰(曰)とれ社(社)堂(堂)む外(外)ハ投(投)上(上)むとバ

其(其)時(時)ハ自(自)称(称)いなり。重(重)忠(忠)と云(云)ふ。逆(逆)胃(胃)ハ総(総)角(角)扱(扱)て提(提)行(行)ハ亦(亦)ハ赤(赤)威(威)の胃(胃)著(著)
 て浮(浮)ぬ沈(沈)ぬ流(流)る者(者)あり。畠(畠)山(山)不(不)使(使)ハみらひの筆(筆)を差(差)出(出)し与(与)へぬ。彼(彼)武
 者(者)嬉(嬉)しげハ取(取)付(付)重(重)忠(忠)曰(曰)汝(汝)ハ何(何)者(者)と我(我)馬(馬)の鞆(鞆)ハ取(取)付(付)て浅(浅)むと教(教)も彼(彼)者
 曰(曰)是(是)ハ塩(塩)谷(谷)小(小)三(三)郎(郎)維(維)廣(廣)と云(云)ふ者(者)少(少)て御(御)芳(芳)志(志)ハ依(依)て十(十)元(元)を免(免)まし。彼(彼)者
 難(難)有(有)さよとて教(教)のい馬(馬)の鞆(鞆)ハ取(取)付(付)て浅(浅)り多(多)る。畠(畠)山(山)ハ二人(二人)馬(馬)一(一)足(足)を肩(肩)ハ
 掛(掛)さしむと遊(遊)行(行)ハ怪(怪)カと云(云)ふ水(水)術(術)と云(云)ふ真(真)ハ和(和)漢(漢)例(例)ハ死(死)豪(豪)傑(傑)なり。り
 斯(斯)て崖(崖)近(近)く成(成)れぬ。塩(塩)谷(谷)浅(浅)瀬(瀬)ハ上(上)りぬ。重(重)忠(忠)彼(彼)提(提)る武(武)者(者)を差(差)上(上)今(今)こそ
 投(投)上(上)るぞ過(過)さよと云(云)ふ。大(大)の男(男)をゆきと抛(抛)上(上)る。彼(彼)武(武)者(者)さる者(者)少(少)てら。投
 衝(衝)ぐと敷(敷)正(正)里(里)大(大)音(音)ハ武(武)藏(藏)國(國)の住(住)人(人)大(大)串(串)次(次)郎(郎)宇(宇)治(治)川(川)跳(跳)渡(渡)の先(先)陣(陣)なり。と自
 称(称)れぬ。敵(敵)ハ味(味)方(方)ハ一(一)度(度)ハ唾(唾)と云(云)ふ。重(重)忠(忠)ハ陸(陸)上(上)る。否(否)馬(馬)ハ步(步)騎(騎)敵
 陣(陣)目(目)掛けて近(近)寄(寄)を我(我)射(射)と云(云)ふ。雨(雨)乃(乃)降(降)り。射(射)まされ。重(重)忠(忠)更(更)ともせと鑑

を傾けて攻進付。木曾方小長瀬判官代表義貞と自称赤地錦の直垂小黒系
威の冒門毛の甲小鍬形赤く成著し。白馬小白覆輪の鞍置くも騎金作
の太刀拔柄一斬てくる。重忠優の歌やと妙笑甲平とて刃の甲守長三尺九
寸。大太刀拔て義貞小向と見下り只一合ふ斬て落と。其猛勇ふやうたう
木曾が手の者さうと引。此時義経より二万五千余騎一騎も流まを渡り著
其勢の決然とて列陣の席を捲がどくをれを。小勢の木曾勢七續八裁り
成る乱走る。當手の大将根井大弥太忠親。褐布の直垂小櫻威の腰巻一
洗革の大鎧を重て著し。白星の五枚甲。猪首小著なり。黒槽毛の馬の太
く遅延小金覆輪の鞍置て跨り。三尺五寸の太刀真向小柄一群る敵中。割
て入。脚手挂繩十文字或ハ梨割車斬中るを幸小切て回る。其太刀下小向一
として命を落さるるなく。碎易して。迎付者こそなく。然れども寄兵と
眼小余る大軍なれを。木曾勢過半討ま。捕六郎由敵討ま討らむ。太刀

矢瘡負をれども。妨止人更叶ふ。主君と二隊小成てこそ必死の軍と云をれと
て根井と俱小残兵を師と退く。寄兵是を邀すと追慕ハ。根井大刀小
怒り七度やぐ及一合すと悪戦と。其死憤の太刀風小漂て果と追者ゆるり
り。根井八余り小属く戦ひ一息継ぐと坂の辺り小聲く。武藏國の任
人小河口源三交河園の任人小船越小二郎。兩人言人根井を組伏人々。比
馬蒐とせ左右より無手と組。忠親巨口然剛と呵々と。己等日本一鳴
呼り奴々の不曽殿の御内。四天王と称ま。根井を組止んと。志こそ優
々。ついで此世の暇とせん。二人を小股小殺。一掃強く締をれを。兩人と。小面色
土のく。おかりて。すも働た得。根井を傾て妻手の股から。船越が。胃の上帯
扱で眼も高く指上深田。唾と抛。胃の重。田を深。涯の底小沈。て。虫
は。ど死。其後。弓手。の。股。河。前。後。の。上。帯。扱。人。曳。や。と。引。上。ま
ども。抛。ら。ん。ま。と。と。鎧。を。馬。の。腹。小。踐。回。強。く。カ。ま。く。揚。ら。れ。ど。ま。や。面。倒。り。と

弓千成馬の下腹(指込馬)と人々(宙)曳揚(ま)のやと云きぬ(深田)投(ま)き
 懐(な)を(河)口(河)泥(河)の中(馬)小(布)を其(伏)定(成)ゆ(り)東(國)勢(是)を(肝)
 を(冷)し(是)は(鬼)の(神)人(間)業(あ)く(も)あ(り)と(戦)慄(躊)躇(して)怖(る)
 其(間)小(忠)誠(徐)々(と)馬(を)歩(せ)木(幡)の(庄)入(都)城(を)き(り)引(り)り(東)國(の)
 勢(ハ)敵(已)不(退)死(す)我(ハ)京(洛)の(先)蒐(せん)と(千)騎(二)千(騎)五(百)八(十)か(り)ひ(く
 小(或)木(幡)醒(醒)翻(ふ)く(と)河(弥)陀(が)峯(の)東(乃)林(原)より(攻)入(も)あ(り)或(ハ)小(野)乃(庄)
 勸(修)寺(成)通(て)七(條)より(入)者(も)あ(り)或(ハ)檀(川)を(步)渡(し)木(幡)山(深)草(里)より(入)
 入(も)あ(り)或(ハ)伏(見)尾(山)月(見)岡(を)步(越)法(性)寺(の)二(乃)橋(より)入(も)あ(り)路(ハ)互
 小(異)ま(も)り(帝)城(を)き(り)攻(入)さ(る)り(り)光(景)な(り)り

義仲出陣松殿之姫愁傷條

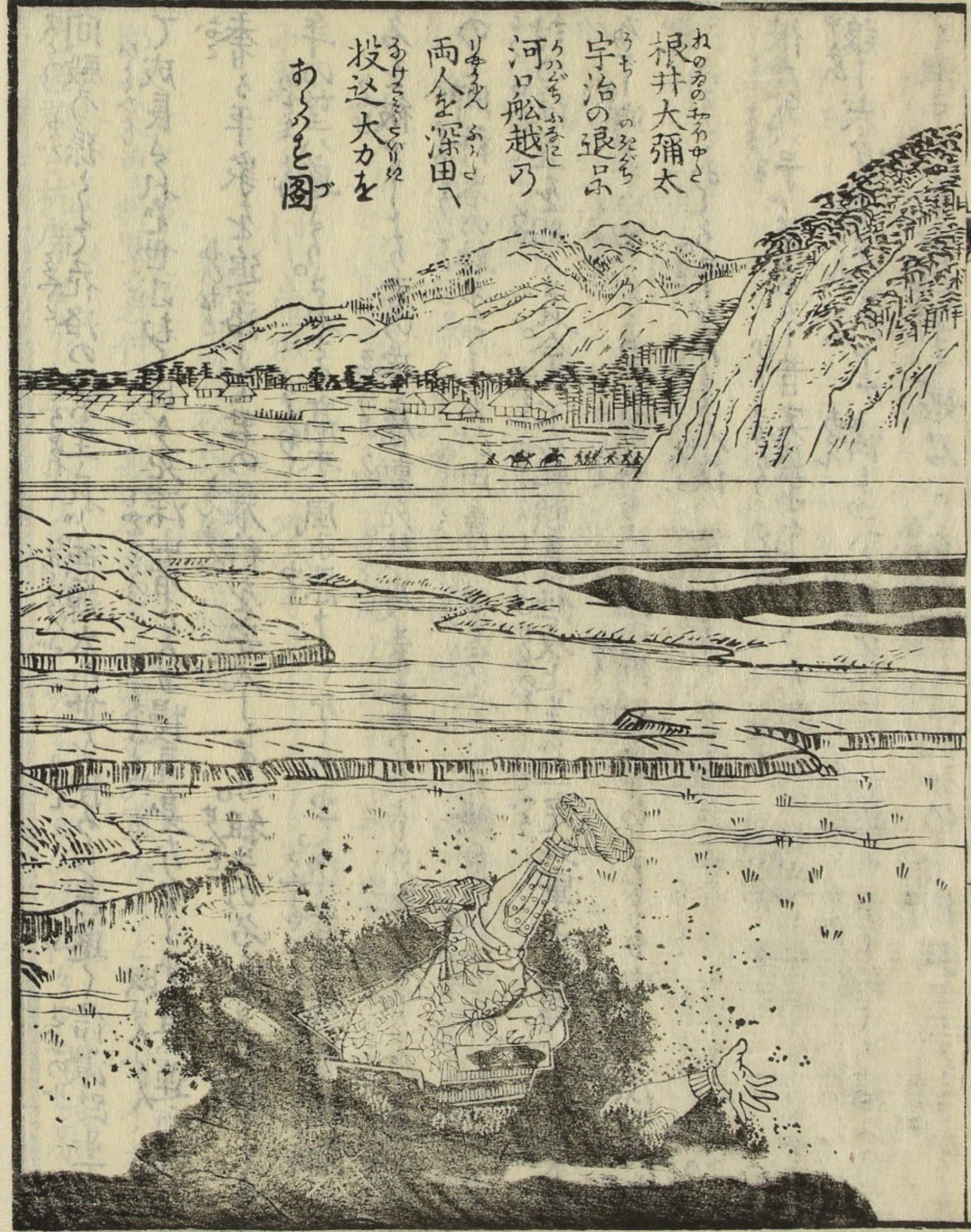
都(小)木(曾)将(軍)義(仲)公(今)般(の)合(戦)三(生)懸(命)の(軍)な(り)と思(は)れ(る)松(殿)
 乃(姫)君(と)抗(席)を(ま)り(平)日(より)睦(しく)契(く)り(御)諸(仰)多(る)予(も)原(猫)

回(殿)乃(孫)々(て)花(洛)の(地)生(れ)惡(源)太(小)世(を)使(め)ら(る)遠(く)信(濃)路(小)下(り
 て)成(長)々(れ)を(世)小(む)は(る)深(山)者(と)入(り)慢(見)身(な)ま(り)且(ハ)運(小)叶(ひ
 奢(る)平(家)を(追)落(して)君(の)震(行)を(安)入(り)祖(先)の(名)を(奉)輝(して)多
 年(の)望(心)遂(より)され(も)高(木)ハ(風)小(西)々(な)り(ひ)中(で)逸(者)の(為)一(度)朝(敵)ハ
 名(を)被(り)より(君)の(睿)慮(動)た(幾)度(素)意(な)れ(昔)々(歎)た(奏)され(も)面(小
 の(御)許(容)の(躰)を(な)り(御)意(小)食(入)玉(も)鎌(倉)の(兵)傍(佐)小(當)家(追
 討(の)院)宣(を)回(され)今(已)小(範)頼(義)經(攻)上(ま)り(一)定(此)軍(小)義(仲)が(身)果(ハ
 盡(し)御(身)小(契)を(ま)り(幾)程(も)あ(り)斯(別)ま(り)宿(世)さ(る)契
 約(小)と(あ)り(予)が(か)く(人)後(ハ)如(何)な(る)人(も)身(成)せ(又)母(小)能(事)ハ(あ)り(予
 彼(虎)丸(予)が(若)る(昔)實(盛)小(乞)得(て)り(數)度(の)戦(場)小(曳)連(今)日(ぞ)討
 艱(ハ)大(た)れ(予)代(予)て(憐)れ(む)と(鬼)を(拉)ぐ(猛)將(も)流(石)妹(夫)の(羈)小(心)弱
 く(泪)々(と)て(白)ひ(る)姫(君)ハ(衣)步(被)て(泣)伏(み)り(稍)面(を)上(り)宣(ひ)る



幼刀圖會卷八

廿四



ねのちのちの
根井大彌太
宇治の退口
河口船越乃
リ人深田
両人を深田
投込大力を
あつと圖

幼刀圖會卷八

廿三

いそも君小見すわなせ一タリ雲なり雨とかゝる其の言を夢してをわみ
枝を連ひて其を比して此言の末の空をあらめて柀の葛まなぐ子日の松の千世
すとも変らしとこそ契とまりしものを神かぬ身の思ひも斯や羊天の別を進
まふたと宣せし言の偽らくを蝦夷か千島の心更なり新羅の百海の果して
も相あ具しまの猶も叶ます野の露と消え後世の一蓮托生と仰げぬ心強く
振あ捨すまる異結を重よく来世も盡め恨み小そと衣の袖もかり付
よくと絆み注み其御容の端麗なる櫻桃の雨を悼も棠梨の風を怨らぐ
かれむ木曾殿の鉄腸は為す湯依々と立て立て不たく種々刻を尽して
練り慰めむらち。早刀々と明らり外の方何となく強がれむ何事も其を
傾む処忽ち越後忠太能景地まり。寐殿の唐紙引用もふ。大将いふ帳
内小姫君と伏せ為す膝小憫然て。大声小。如何斯も亦解て御坐ぞ宇治の手を
敗れ敵徒洛中へ押来りいのを疾く御出陣在て防禦の備をなりし

迫り言上と。木曾殿大いおられたゆ如何か強敵なりも楠根井が防
ぐ上三日六持堪んとさひいふ輒く敗らき一運の傾く処かぐと身と起き
いふを。姫君猶もとり苗もいひ。只脚身を全し再度更を謀む練は
流つる口鏡いふを木曾殿持余と起こひ忠太長軟し日本の猛将
も運盡てと斯未練むいふいふの。噫け腹痛やとはな大庭小起下
腹掻切て失ふ々り。大将是小属され姫を舎て枕頭なる武具引寄糸井の衣
重の者ら上小赤地錦乃直垂を芽ち紫威の胃投掛を出せ姫君八且之や
此世の別離を纏ひの上り轉出胃の袖もとりとり。声を放て注み彼九里山
の文戦小項羽韓信が策小中で今必死と立出時鎧の袖もとりとり人數行度
氏か涙の雨も今身の上もとりとり。木曾殿も亦もれる躊躇もいる。再
度津田三郎菟末り。瀬田の寄兵田上供御乃瀬より涉し。合戦最中の一
告来りい今洛中の脚在陣危い疾々法皇幼帝を供奉。西國へ同じいふ

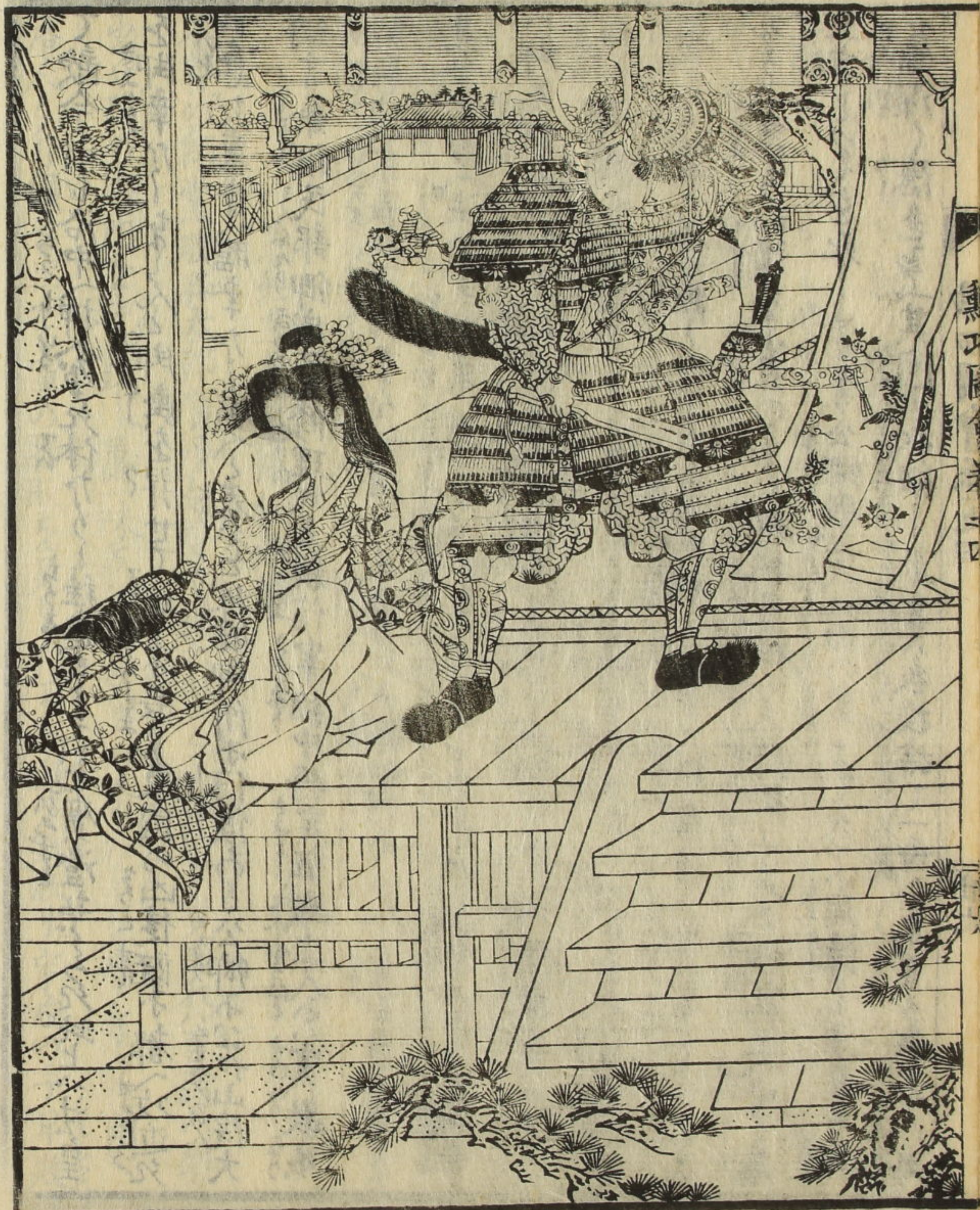
北國へ落しし勸めぬ然れども木曾殿頭を振ふ此期小治の戦場を落
 る所存毛頭あり亦主上仙洞を虜にす人更ハ猶有るなり只最期の際小
 今一度天顔を拜し深く討死せん勢揃せよと仰るなり津田領掌一庭
 上へ馬曳出し疾乗せと忙しむる木曾殿泣伏せ姫君を賺し慰ら馬ひた
 寄て赤騎を小何処に居り久人彼虎丸走り来り大将を執視て怒
 げ小敷声吠身を躍して庭井小投し死したり木曾殿大の憐れみひ
 歎類とらふも主の命運究る所身を殺して恩小酬更の哀さよと感涙
 を催し遂小手勢三百騎許して仙洞にて押出されり

義経主臣守護仙洞條

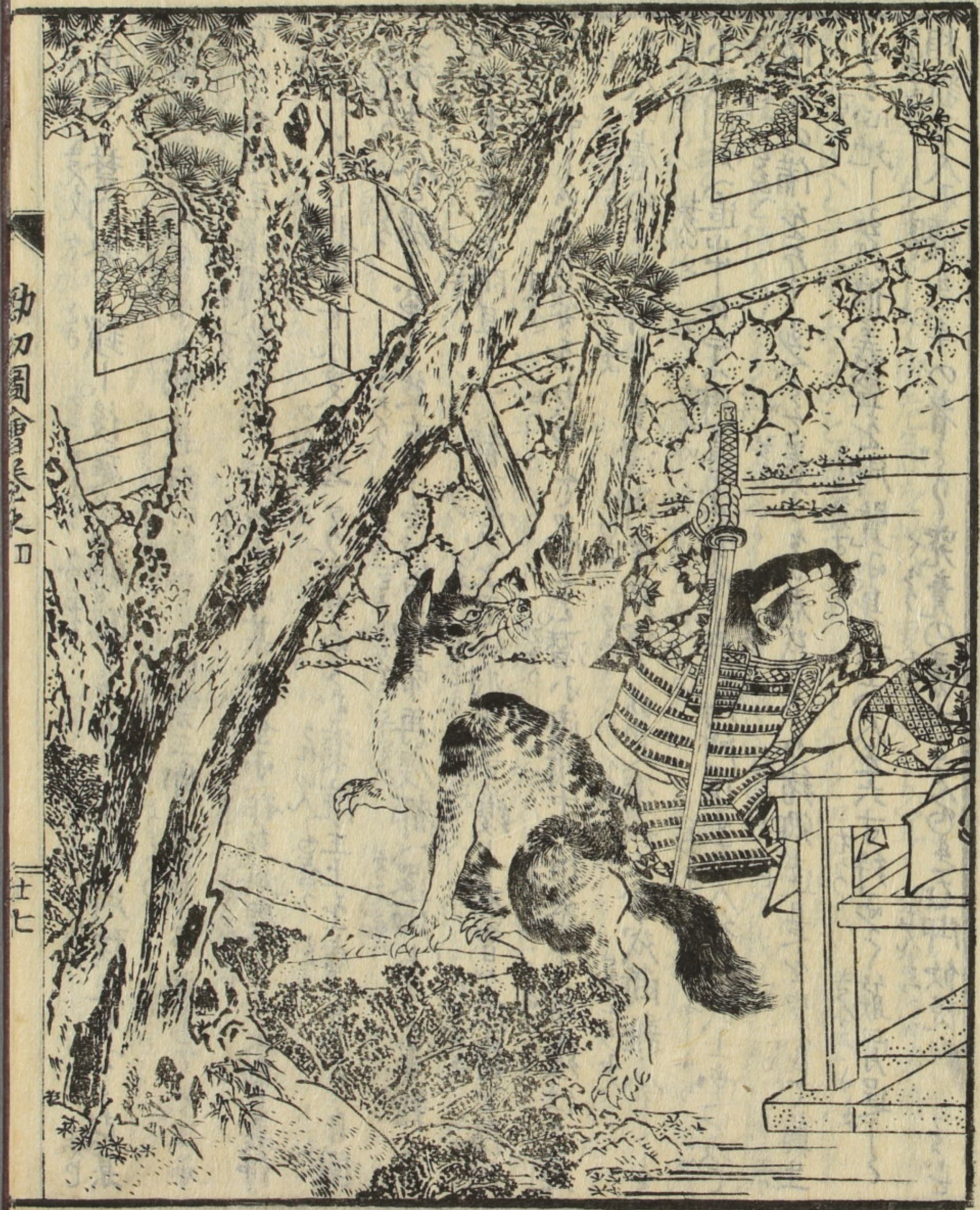
木曾の郎黨那和太郎廣澄と曾て捕六郎と示合せ一更あれ百騎の勢
 あり院の御所を守護し萬味方利を失ふ初帝法皇を虜にす北國へ
 落んと侍候を出して軍の勝敗を見せむる小追々弛返り宇治の手早敗

て敵今小も浴中押入死体たりと往進しむる廣澄せり死此上ハ法皇
 を御幸なりと仰出さる廣澄大の怒り此期小及ハ御猶豫有るま
 り急ぎ東寺臨幸なりと奏す此時御所小侍候ある公卿小花山院大
 納言兼雅民部卿成範修理太夫親信宰相中将定能殿上人小実教成
 経家俊宗長以下侍々々列位大の驚死天機如何あり人と互小目と目を
 見合せし法皇も關東へ再三院宣を下さる一更あれ其ハ小脚幸
 ハ御見合有るより仰出さる廣澄大の怒り此期小及ハ御猶豫有るま
 疾々脚裏小召生いせりま々小公卿も為方なく泪ながる小菓踏を
 履むる小多心ち弘澄を小見のしく搔抓引杖二大許抛上るれ切石の上へ墮と落
 二言といえむ死しり公卿殿上人北面の鞞中て大の周障し法皇も御
 簾深く隠き其間小衣被一者等衣投捨て一舟小木曾ら兵士門外

義仲
出陣
の
妹
君
と
余
波
と
惜
圖



無
江
圖
會
長
七
口



幼
刀
圖
會
長
七
口

七
七

追出禁門堅く鎖し後庭上小蹲踞て中々緒御脚後た有へうむ某
 鎌倉殿の御舎弟九郎義経の郎黨下伊勢三郎義盛と申者申てい主小
 てい義経尾張國著いひ時夜中其某密小招た此度京小木曾義仲
 不勢なれを敗軍せん更必然りさ申あらむ渠院主上を虜とりて自國
 洛往人と練る釜し然有て法皇幼帝再度都遷御あらん更難く
 人汝手の者を師具して都忍ひ上上仙洞を守護し木曾が狼藉を防た
 いと命し小付姿をち拾して忍上上潛小御所中推忝し傍護仕りい処
 主人の慮のて今廣澄御幸成促いゆ渠奴が命成断難入るうと
 不残門外追出い今御意を安人ふひ御所申小在人程の武士達と以て
 防禦の備をたしとて奏し君成りし緒御達是を安食て蘇生
 ころ心地いひ彼義盛を御覽小身材六尺五六寸許少く筋骨逞しく
 相貌万人小優き申の者より究竟の勇士と申もき御欣悦斜なるむと

義経遠計を聞りゆか危急を救ひし更神妙なり且く四門を固め木曾が狼
 藉を防いへと宣命あるふと義盛承上湯士北面を四方小賦て敵寄きとて
 一箭射んと待りけり斯ともあむと木曾殿公今日を限の戰場と思されえ
 現世の余波小今一度天顔を拜せん御所を指て忝れ多小義盛小追出
 されし耶和郎堂追々小馳来上大将の馬前小跪た中々八諸も王將耶和
 廣澄仙洞を守護いい処宇治の軍小身方利を失ひいと上上自を東上御
 幸かすもを針り小何者ともあむと廣澄を抱殺し我徒を追出して官
 門厳く鎖固い今小院忝いふも其申受いも御賢慮を聞させいと口を楯
 言上も木曾殿大不致たい廣澄維が下知を得て院の御幸を促し
 所然ありて小愈院乃御惡をこそあめ好々義仲小野心を更皇天社
 照覽しむる龍顔を拜し更と叶いむも心底の程を奏し爛熳し討死
 せんと馬小鞭を加へ御所乃門小弛着左馬頭義仲即今戰場小向戦死

仕人と期し、今生の御余波一度天顔を拜し、是より推参仕りと
 大音小呼りあり。御所中、小維谷る者もなく、静然とつと三日も過ぎ、木
 曾殿、潜然と御落涙あり。予異心ありて、仙洞を虜せんと思ふ。今日よりて手
 を空らしめ、九若も將軍宣下、然蒙り身の法皇、成備小衝て、踵を争かんと
 比怯の軍、不為とあり。かゝる即黨の練言、不用、只廣澄を以て、院中不慮
 の変を守らせむ。予、小渠一己の才、覚めて虜せんとせしを、義仲が命せし
 中、小思召末期の院、赤をも免れ、おぬと覚す。武運盡きを、斯くして為り、
 の吏の齟齬と、物と愁然と、て在る。小忽軍使、還く、蒐き、敵軍
 已、小幡伏見を、往て、下京、攻来いと、報、多、小曾殿、氣を、屬、され、蒐
 向ひて、存亡の一戦を、逐人の、駒の、鼻、以、多、整て、七條を、望、押出、院中、小荒
 氣の、義仲、如何なる、変、更を、引出、と、針の、席、小坐、と、心地、し、手、小あせ
 握て、居、ひ、小何、更も、なく、退、た、院を、始、より、御所中の、男女、青息、吐、く

悦、院、大膳、大夫、業、忠、小仰て、義仲、再び、引、及、来、る、否を、遠、見、せ、し、
 業、忠、承、り、東、面、の、築、垣、小登、て、櫓、久、く、眺、居、と、小、今、や、合、戦、最、中、と、刀、乞、て
 七、條、八、条、の、間、金、鼓、の、音、矢、叫、の、声、驟、く、破、煙、天、を、曇、せ、馬、蹄、地、を、裏、し、世、間
 今、や、沈、没、と、と、疑、ま、ぬ、然、小、忽、と、東、南、の、方、より、馬、武、者、五、六、騎、混、鞭、
 御、所、を、指、て、蒐、来、と、小、業、忠、お、と、た、須、弥、木、曾、が、負、て、交、と、小、や、と、追、は、
 倭、小、熟、刀、を、れ、月、押、さ、さ、さ、背、を、り、と、何、者、と、異、小、彼、武、者、ど、も、門、外
 小、馬、を、と、築、堀、を、見、上、高、声、お、是、六、鎌、倉、か、る、兵、衛、佐、頼、朝、の、舎、弟、源、九、郎
 義、經、宇、治、の、手、先、攻、敗、り、仙、洞、守、湯、の、ち、馳、参、り、奏、聞、の、ま、ち、
 々、業、忠、余、り、の、嬉、し、さ、小、足、下、も、覚、む、因、と、恥、下、さ、ら、恥、損、
 小、か、ら、弓、杖、小、と、り、て、延、上、小、参、候、義、經、が、啓、条、具、小、啓、奏、
 大、小、悦、お、の、伊、勢、三、郎、小、命、て、宮、門、を、開、し、を、め、義、經、以、下、門、外、
 甲、戌、脱、て、赤、伊、と、れ、御、氣、色、小、依、て、中、門、の、外、か、る、車、宿、小、馬、
 士、心

せむ。儲法皇(中門)の羅門より睿覧あつて。出羽守貞永をりひて六人少
 年齢家名任國を向せむ。貞永畏て狩衣の下に紐系威の腹巻を著し太刀と腰
 夾を取出る。太刀は御所の簀子に立す。宣旨のかりむを相達する。其時第一
 坐の大將赤地錦の直垂を崩黄の唐綾を疊べ。坐紅不威する。曾成著し金
 造の太刀帶より龍頭小鍬形を著し甲成後を著し郎堂小持せり。こころは兵
 流法頼朝が異腹の舎弟常盤腹の三男九郎冠者義経生年二十五才。此
 度木曾退治の爲搦手の大將を蒙りし。と自称せり。其次全平の錦の直
 垂赤糸威の曾を著し。夷物造の陣太刀帶を著し。將武藏國の任人。秋友の末
 裔高田山次郎重忠生年廿一歳と自称其次八菊綴の直垂。赤糸威の曾成著し
 白銀造の太刀佩を著し。將相摸國の任人。渋谷三郎重國が嫡男。右馬允重助生年
 四十一歳と自称其次八蝶の九の直垂。赤糸下濃の小曾を著し。將けく
 相摸國の任人。河越太郎重頼生年二十五才と名をのる。其次大文字を三ツ

宛書する直垂。赤糸威の曾著し。將。同國の任人。梶原平三景時が嫡子源
 太左衛門景季生年廿三才と自称其次八四目結の直垂。赤糸威を著し。父一
 なる鑑小下。金物少を著し。將。近江國の任人。佐々木源三義秀が四男。四
 郎左衛門高綱生年二十五才。今度宇治川の先陣とて名をのる。貞永一々小
 記録し。睿覧供へられ。法皇殊小感。とむ。重て。今般上洛の子細を尋す。ま
 せむ。義経纏ふ。や。され。る。八。頼朝疾より木曾が乱。妨を制せん。をかりひ。ひ。ひ。ひ。
 關東の軍勢。遑なく。心。を。つ。時。日。を。過。し。ひ。處。再。度。の。院。宣。小。恐。入。り。方。度。
 を。抛。て。六。萬。余。騎。の。軍。卒。於。集。某。と。範。頼。を。大。手。搦。手。の。大。將。と。し。て。
 指。上。し。ひ。處。範。頼。八。瀬。田。より。入。洛。仕。手。著。小。い。ひ。ひ。ひ。彼。手。の。合。戦。如。何。い。中。人。未
 だ。参。候。仕。く。む。某。と。宇。治。の。手。成。敗。を。合。戦。今。最。中。小。い。ひ。ひ。ひ。先。仙。洞。の。御。史
 三。遣。し。義。仲。を。川。原。面。面。て。其。勢。小。攻。圍。や。取。敢。を。院。参。仕。ひ。と。奏。せ。し。る。
 院。益。御。氣。色。悪。く。又。仰。出。され。る。義。経。汝。先。達。て。伊。勢。三。郎。を。羈。小。上

院中守護を命ぜり。今亦大川を渡り強敵を敗り、弛参る条返り神
 女たり。但し木曾が殘黨弛及り、狼藉不及ふ。おれを、今夜八脚所
 不在、傷護し、と宣命ある。義経畏て回奏され、院中の
 守護是たふ五人の輩、命を置かむ。鉄城石室のて、思召御托を高
 く御森山、臣、再度戰場、小蒐向、木曾が類族残たり、討取乱を治して
 後、参候仕り、御暇を賜り、五人の武士、守護の義を徹し、命
 其身、中、宮門を出て、馬小跨り、戰場を臨んで向られ、真、其骨柄、巍
 々、とて、天晴、當世、俊傑、と、諸人、奉て、感賞、たり。

木曾義仲勲功會後編卷之四畢

